様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：２３８０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０１１７５

研究課題名（和文）近代ロシアの帝国医学の創出と医学地誌

研究課題名（英文）The Formation of the Imperial Medicine in Modern Russia and the Medical Topography

研究代表者
宮崎　千穂（MIYAZAKI, CHIHO）

静岡文化芸術大学・文化・芸術研究センター・准教授

研究者番号：２０７２３８０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：今日の医療をめぐる不均衡な国際的秩序は、WHOの疾病地図にみられるように、医学地理学的情報に多くを依拠している。本研究では、これを19世紀後半にグローバルな規模で伝播した西欧医学の諸問題の残滓ととらえ、医学と地理学、民族誌が結びついて帝国の空間を創り出すさまを描くことを試みた。具体的には、ロシア陸軍及び海軍の軍医たちがそれぞれ日本の寄港地と中央アジアの植民地において展開した梅毒に対する医療実践、そしてそれらの場所に関して編んだ医学地誌に着目し、西欧由来のロシア医薬学知が異なる自然・文化環境を背景とする在来の医薬学知といかなる知的な交渉を持ち、それを理解しようとしたのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、具体的に、19世紀後半におけるロシア帝国の陸海軍軍医の寄港地及び植民地における梅毒に対する医療実践及び医学地誌の編成のあり方を明らかにした。このことは植民地主義と医学・医療の関連を論じてきた帝国医療研究が従来対象としてこなかったロシア帝国の事例を新たに呈示することであり、本研究は従来の帝国医療研究を相対化し豊かにする一助となった。また、本研究はロシア軍の医療実践や医学地誌の編成がその舞台となる場所の在来知との交渉を必須としていたことを明らかにしているが、このことは新型コロナウィルス感染症への対応を含めて今日その意義が問われている近代科学の内実に迫るために重要な観点を示すこととなった。

研究成果の概要（英文）：Today’s unequal international order on medicine, as seen on the WHO’s disease map, relies on geographical information in many ways. This research regards that issue as remines of problems caused by worldwide spread of Western medicine in the second half of the nineteenth century and tried to describe this medicine, connecting it with geography and ethnography, and how it played a role in the creation of various empires. Specifically, this research focused on Russian surgeons’ practical medicine toward syphilis in Central Asia and Japan and the formation of medical topography in these places. Throughout analyzing the aforementioned, this research clarified how Russian medical knowledge based on Western knowledge, tried to integrate with and understand the local knowledge which had developed in the different natural and cultural background.

研究分野：医学史

キーワード：医学地誌　風土病　流行病　梅毒　ロシア帝国　中央アジア　長崎　鉱泉

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1980 年代における D・R・ヘドリック（D.R.Headrick）の研究（The Tools of Empire.1981）を皮切りとして、近代の欧米諸国や日本による植民地における医療・医学の実践および制度化を、植民地ひいては人類史上における医療・医学の〈進歩〉と捉える従来の歴史観を批判的に論じ、それを〈帝国の道具〉、〈統治ツール〉とみなす〈帝国医療〉、制度的な知（学知）に関する研究が蓄積されてきた。日本国内においても、特に 2000 年以降、国際的にみて優れた研究が発表されてきた（見市雅俊他編『疾病・開発・帝国医療』2001、飯島渉『マラリアと帝国』2005 等）。

本研究代表者のこれまでの研究は、英仏や日本の植民地を舞台とした急性伝染病の医療経験に偏重していた帝国医療研究に対し、19 世紀に西欧を起点としてグローバルに伝播した梅毒検査制度（メディカル・ポリス、売春統制制度）、特にロシア艦隊から日本へ伝播したそれに光をあて、新たに〈医学の地理学〉という視角により、西欧医学の〈未知との遭遇〉のあり方、すなわち、伝える側と伝えられる側の双方へのインパクトを再検討したことに特色がある（特別研究員 PD、RPD「『性病』と帝国―ロシアから日本への『検黴』制度の伝播にみる医学知の成立―」等）。

本研究の代表者は、ロシア国立海軍文書館等での史料の発掘と分析を通して、ロシア艦隊が世界周遊を本格化させた 19 世紀中葉に、ロシアの医学知が異文化空間での医療実践を通して新たな医学知として更新される際、重要な役割を果たしたのが、この時期に急激に増加した〈医学地誌〉を記すという海軍軍医の知的営為、そしてその知を共有する場として登場した学術的組織（海軍軍医会、定期刊行物）であったことを指摘した。医学地誌の分析からは、科学史全般の問題としての重要性が浮き彫りになった。クリミア戦争後の〈大改革〉の機運の中で目指されたロシア海軍医学の〈科学化〉は、項目別の観察方法の開発、18 世紀以来の博物学と 19 世紀の地理学及び民族誌の結合でもって異文化を知る技術の確立に委ねられていた。ある特定の地域のヒトを含む環境を科学的に表象する知的な技術が、帝国の版図の拡大と統治のために求められていたのである。こうした医学地誌的視点から、ロシア艦隊による日本への検黴の伝播について考えると、そこには日本及び日本人に梅毒の感染源であり不道徳であるというラベルを貼り、それを前提として兵員の健康維持方法を開発するという海軍軍医たちの思考を見出すことができる。そして、そうした思考を背景として日本で初めて実施された梅毒検査が、日本において性感染症予防と近代公娼制度の展開という近代化の回路が敷かれる最初の契機となったのであった（宮崎千穂「〈彼らの病〉を予防する―国際政治・医学地誌・文明化の回路―」『歴史の理論と教育』2015、「ロシア艦隊医が描いた幕末長崎の医学的風景―〈亡国病〉としての梅毒と〈病める日本〉―」『歴史学研究』2011、「「医学の地理学」と帝国空間―ロシア艦隊による長崎への検黴の伝播をめぐって―」『ロシア史研究』2009 等）。

以上のような研究の過程において、近代の帝国医学、帝国空間の創出と医学の関係を解明するために新たな課題が浮上した。それは、ロシア海軍の長崎での梅毒医療経験を中心に論じていたこれまでの研究を、ロシア帝国の軍政（陸軍）によって植民地化が進められていた中央アジア地域にまで広げることである。そのようにロシア帝国の植民地へと研究の視野を広げることで、多様な地域を対象として編成されていた医学地誌や現地での医療衛生行政のあり方のそれぞれの特徴を明らかにすることが可能となり、そうした研究の成果がロシア帝国の医学とはいかなるものであったのかを検討する礎石となることが期待されたのである。

２．研究の目的

今日の医療をめぐる不均衡な国際的秩序は、世界保健機関（WHO）が示す疾病地図にみられるように、医学地理学的情報に多くを依拠していると思われる。従って、本研究では、これを 19 世紀後半にグローバルな規模で伝播した西欧医学の諸問題の残滓ととらえ、医学と地理学、民族誌が結びついて帝国空間を創り出すさまを、ロシア陸海軍を中心として形成された医学の〈科学〉化とそれに貢献したであろう医学地誌の編成に着目して明らかにすることを目的としていた。具体的には、医療衛生行政に関する文書や軍医らの日誌等にみられる医学地誌的な著述を分析し、医学・衛生学的な観察・記述のあり方、異なる〈環境〉―ヒトを含む―の解釈・表象のされ方、そしてさらには、それらの意味を描き出すことを企図した。そしてそこでは、とりわけ、ロシア帝国の植民地と、〈国民病〉たる〈性感染症〉が、同時代に創り出されていることに着目し、それらを結びつける医学地誌に注目することで、近代の帝国医学そのもののあり方を明らかにすることが目指された。かような研究が、今日の医療をめぐる国際秩序のより良いあり方を探る一助となると考えられたためである。

具体的に、本研究が課題としたのは以下の通りである。

第一には、ロシア海軍における医学知の循環を明らかにすることである。帝国の医学のあり方を描くためには、航海中の軍艦から本国へと還元された医学知の循環のあり方を解明する必要があると考えられた。海軍医学において、地球上における寄港地などの特定の場所と本国との間で知が往還しているさまは、医学地誌を編むための観察・記述の技術が更新・展開されることに反映されていると考えられる。それゆえ、本研究ではまず、医学地誌を通してみられるロシア海軍の医学知について、長崎とそれを中心とする東アジア、そしてまたその外部へと繋がっていた

ロシア海軍の医療・保養ネットワークを念頭に置きつつ（宮崎千穂「外国軍隊と港湾都市―明治30 年代における雲仙のロシア艦隊サナトリウム建設計画を中心に―」『スラヴ研究』2008）、梅毒の予防（医療警察的監督）のみならず、その治療のために鉱泉をめぐる学が展開されるさまを詳らかに描くことが企図された。

第二に、ロシア陸軍における医学地誌の特質の解明が期待された。19 世紀ロシアの帝国医学の特質を知るには、その中心にあった陸軍医学との比較研究が欠かせない。本研究では、19 世紀後半においてロシア軍医らが梅毒の蔓延を特に問題視していた中央アジアのトルキスタン軍管区（トルキスタン地方）に焦点を当てることとした。

第三に、医学と地理学、民族誌、統計学との接続のあり方を描き出すことが企図された。19 世紀ロシアにおいて、地理学、民族誌、統計学は科学の〈三本柱〉とみなされている（高田和夫『ロシア帝国論』2012）。近代のロシア医学は、軍事医学と分かちがたい。本研究では、上述の第一、第二の観点からの課題に取り組むことで得られると予想される知見から、ロシア医学を牽引していた陸軍、そして、諸外国を含め地球上の医療のあり方を把握し自らの医学を成立させようとしていた海軍という二つの軍事医学において、医学と地理学、民族誌、統計学が接続されるさま、さらには、ロシア医学が〈未知〉の場所と本国とを結ぶ知の環の中で〈科学〉として洗練化されるさまを描くことが期待された。

３．研究の方法

本研究では、19 世紀後半にロシア帝国が広大な地域を植民地化する際に、特に医学地誌の編成に注目しながら、いかなる医療・衛生行政を実践として試みていたのか、また、それを支える医学知がいかなるものであったのかという問題を、帝国の医学の形成、さらには帝国空間の拡大、そして植民地統治との関連において解き明かすことを目的としている。そのため、研究の方法として、まず、ロシアおよびウズベキスタンの文書館等にて、陸軍及び海軍の医学地誌に関連する史料、出版物の調査・収集を行った。そして、収集した医学地誌的史料を分析する際には、特定の地域の環境がいかに観察され解釈されているのか、またその観察と解釈がいかなる学術的背景によって生じたものであるのか、またさらに医学地誌の編成や医療・衛生実践が近代の帝国の統治といかに関わっていたのか、といった諸問題の解決を念頭に置いた。

近代の帝国の医学のあり方のひとつの形を、医学地誌を介して解明するためには、医学地誌全般の特色を描き出すことが理想的である。しかし、軍医らの医学地誌的な視点は博物学的であり地誌はさまざまな項目によって成り立っているため、それぞれの項目が有する特色について丁寧に明らかにしてゆくことが必要である。それゆえ、本研究では、医学地誌が含有していたさまざまな視点のうち、ロシア海軍及び陸軍の医学が共通して〈闘い〉の対象としていた梅毒に関連する項目に焦点を絞って研究を進めることとした。具体的な研究の方法は、主には以下に述べる二つの課題を解決することである。

第一に、ロシアと日本におけるロシア艦隊の寄港地である長崎とを結ぶ科学として、鉱泉学に着目した。ロシア艦隊の軍医たちが長年の間闘ってきた梅毒をめぐる科学として、彼らが編んでいた医学地誌の項目のうち、「鉱物学」（主に温泉）が研究の対象として浮上した。従って、ロシア海軍軍医が著した雲仙・小浜温泉をはじめとして日本の鉱泉についての論を分析することとした。そのために、本研究では、ロシアのサンクトペテルブルクにある国立ロシア海軍文書館所蔵のアーカイブ史料、同市のロシア国立図書館が所蔵する 19 世紀出版物などの調査を実施して関連資料を発掘・収集してその分析を行うとともに、日本国内における文献調査や長崎県雲仙市にある小浜温泉地区、雲仙温泉地区においてフィールド調査も実施することとした。

第二に、ロシア海軍が長崎において医学実践を展開していたのと同時期、すなわち 19 世紀後半にロシア帝国による植民地化が進んだ中央アジアにも視野を広げ、ロシアにとっての異文化空間である中央アジア（トルキスタン地方）においてロシア陸軍の軍医が何を問題とみなし、いかなる医療実践や衛生行政を実施したのかを明らかにすることが目指された。特に、1867 年のトルキスタン総督府及びトルキスタン軍管区の設置以降の梅毒の蔓延状況とその制御策について明らかにするため、本研究では、その関連資料を総督府の所在地であったタシケント市（ウズベキスタン）にあるウズベキスタン共和国国立中央文書館所蔵のアーカイブ史料、同市の国立ナヴァーイー記念図書館やサンクトペテルブルクにあるロシア国立図書館等に所蔵されている 19 世紀出版物の調査、そして、タシケント市等での現地フィールド調査を実施し、それらにより収集することができた資料を分析することとした。

４．研究成果

本研究では、上述のような研究の目的を達成するため、ロシア陸軍及び海軍の軍医たちがそれぞれ日本の寄港地と中央アジアの植民地において展開した梅毒に対する医療実践、そしてそれらの場所に関して編んだ医学地誌に着目して研究を進めた。その結果、西欧由来のロシア医学知、そしてそれに基づくロシア軍医らの医療・衛生実践が、異なる自然・文化環境と対峙した時、在来の医学知と少なからず知的な交渉を持っていたことが明らかとなった。ロシア軍医たちはそれらの在来の知を理解することを試みており、さらには自らの知に組み入れることさえも試しながら、彼らにとって〈未知〉の場所の病への対応に備えようとしていたのである。

本研究の主な成果は、以下の通りである。

(1)『ロシア史研究』（第 106 号、2021）に「〈マラズ〉からロシア帝国の〈梅毒〉へ―一九世

紀後半の中央アジアの風土性梅毒と統計学・地誌学・民族誌学―」と題する論文を掲載し、以下の内容の研究成果を発表した。

15 世紀にヨーロッパに出現した梅毒は、瞬く間に世界的に広まった。この病はさまざまな名で呼ばれたが、その中でもよく知られているのは「フランス病」という呼称である。本研究では、元来、中央アジアにおいて「マラズ」および「ザヒム」と呼ばれていた二つの（別の）病が、ロシア人医師たちによる医療実践や研究を通して、どのようにロシア帝国の「シフィリス」（という名の病気）に組み入れられていったのかを検討した。19 世紀後半におけるロシアによる中央アジア征服後、ロシア人医師たちは、梅毒を含めて風土病的な病の制御を試みていた。その際、それらの病気に対して、ロシア人医師たちは医療実践と統計・地誌・民族誌的な疫学という二つのアプローチを採っていたことを指摘できる。まず、医療においては、西洋式病院が重要な役割を果たしていた。そのうちのひとつが、タシケントの婦人・小児外来であり、ロシア人女医たちは、そこで、その土地の病について調査し、それらをロシア医学における疾病分類に振り分けた。また同時に、トルキスタン総督府の所在地であるシルダリア州の州統計委員会の医師たちは、その土地とその住民の特徴を統計、地誌および民族誌の観点から分析する活動をしており、それが、医師たちが風土病の流行の原因を説明する際に役立った。ロシア帝国の植民地空間としての中央アジアにおいては、このように医療実践と統計・地誌・民族誌的な疫学という二種類のアプローチが、その土地の病を制御するために必要であると考えられていたのである。

(2)『ロシア史研究』（第 110 号、2023 年）に「タシケント市におけるロシア帝国の梅毒・VD をめぐる医療警察的監督―軍隊・非感染証明・接触者調査―」との題目で以下のことを解明した論文を掲載した。

1970 年代中葉、中央アジアのロシア領トルキスタンでは、梅毒・VD 制御策として医療警察的監督が整備され始めた。梅毒・VD の医療警察的監督は、医学地誌の編成においても注目されていた衛生行政のひとつである。本研究は、それをロシアの帝国医療の一端と考え、〈梅毒・VD〉対策としての「医療警察的監督」の制度化とその実態を解明した。それは以下の通りである。

トルキスタンのシルダリア州の衛生事業は西欧由来の「医療警察」の名のもとで行われていたが、その一環としての「ヴィーナス病の医療警察的監督」は、その呼称及び実態において、とりわけ「医療警察的」性質を濃く纏っていた。医療警察的監督は文字通り医療と警察との連携により成り立っていた。その理想的な手続きは、罹患兵士への接触者調査、そして、それに基づく売春婦の捜索・医学的検査による非感染の証明であった。しかしそれは、多くの場合、罹患兵士の自白に基づく接触者調査の本質的欠陥、軍医と警察の間での職務上の認識のずれなどを原因として、上手く機能していなかった。また、医療警察的監督はロシア軍の性売買問題を映し出していた。現地女性のロシア式売春統制制度への組み入れや売春に従事していた「兵士の妻」たちには植民地空間における社会的変容やジェンダーの問題がみられるが、これらはまさにロシア軍を通して発生したものであった。

(3)『専修史学』（第 74 号、2023）に論文「〈鉱泉〉をめぐる知の交差―ロシア海軍軍医スリューニンの「日本の鉱泉についての概観」（一八八八年）と〈温泉〉の近代化―」を掲載した。その内容は以下の通りである。

1900 年代初頭において、ロシア艦隊は雲仙にロシア海軍専用のサナトリウムの建設を計画していたが、その時同艦隊が目指していたのは東アジア一円を視野に入れた雲仙の療養地化であり、そこでは雲仙に対し純粋に医療的な機能が期待されていた。本研究が光を当てたのは、1980 年代のロシア艦隊の雲仙利用を学術的な面から準備することになったロシア海軍軍医スリューニンの日本の水・鉱泉を解釈しようとする知的作業である。スリューニンは、1888 年、ロシア海軍の医学専門の学術雑誌である『海軍論集医学附録』に「日本の鉱泉についての概観」（以下、「概観」）を連載した。『海軍論集医学附録』には、19 世紀中葉以来、ロシア海軍軍医が地球上の〈未知〉の場所を調査して編んだ医学地誌が多く掲載されており、スリューニンの「概観」もロシア海軍に有用な医学地誌的な学問的枠組みの中で成立したものであった。

従来、鉱泉をめぐる近代科学は、水を、それを含む化学成分を通して理解する姿勢にその特徴が見出されてきた。このことは、明治期の日本において温泉が鉱泉と呼ばれるようになったことにも反映されている。しかし一方で、本研究により明らかになったことは、ロシア海軍軍医スリューニンの「概観」が西欧由来のロシアの鉱泉をめぐる医学・薬学知を、中国由来の本草学的知や近世日本の医家たちによる温泉論、さらには温泉地の人びとの言い伝えが織り成す温泉知の世界へと組み入れようとするものであったことである。そしてそこには、まさに近代日本における温泉をめぐる知の近代化の内実を見出すことができる。

本研究では、19 世紀後半におけるロシア帝国の海軍及び陸軍の医学地誌のあり方について、疾病としては梅毒に、また、その治療法としては鉱泉にといったように、具体的な事例をアーカイブ史料や当時の出版物、現地におけるフィールド調査に基づき解明することを試み、上述のように一定の成果を得ることができた。一方で、ロシア帝国における医学地誌の全体像の解明はこれからの課題として残った。それは、本研究の期間中に新型コロナウィルス感染症の世界的流行などにより海外における文献及びフィールド調査に限界があったことにも起因している。しかしながら、本研究の期間中においても、ロシア帝国における医学地誌の全体像の解明に寄与しうる史料の調査を可能な限り進めており、このことは次なる研究の進展に繋がるであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 宮崎　千穂	４．巻 110
２．論文標題 タシケント市におけるロシア帝国の梅毒・VDをめぐる医療警察的監督―軍隊・非感染証明・接触者調査―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ロシア史研究	６．最初と最後の頁 3-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮崎　千穂	４．巻 74
２．論文標題 〈鉱泉〉をめぐる知の交差―ロシア海軍軍医スリューニンの「日本の鉱泉についての概観」（一八八八年）と〈温泉〉の近代化―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 専修史学	６．最初と最後の頁 49-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮崎　千穂、E・エルドルジョン	４．巻 16-1
２．論文標題 ウズベキスタンにおける新型コロナウィルス感染症対策	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本渡航医学会誌	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 宮崎　千穂	４．巻 854
２．論文標題 感染症と個人・国家・地域ーCOVID-19 の世界的流行の中で飯島報告・山岸報告を聞いてー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 歴史評論	６．最初と最後の頁 79-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮崎千穂	４．巻 106
２．論文標題 〈マラズ〉からロシア帝国の〈梅毒〉へ―一九世紀後半の中央アジアの風土性梅毒への医療実践と統計学・地誌学・民族誌学―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ロシア史研究	６．最初と最後の頁 104-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 宮崎　千穂
２．発表標題 ロシア海軍医学と〈近代化〉される雲仙―医薬学の知が交差する場―
３．学会等名 専修大学歴史学会大会小シンポジウム「帝国の軍隊と医療・医学知」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 MIYAZAKI Chiho
２．発表標題 The Russian Naval Medicine and Modernization of the Mineral Springs in Unzen
３．学会等名 10th World Congress of ICCEES in Montreal（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮崎千穂、エルムロドフ・エルドルジョン
２．発表標題 ウズベキスタン共和国における新型コロナウィルス感染症対策
３．学会等名 グローバルヘルス合同大会2020大阪（Joint Congress on Global Health 2020 in Osaka）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 宮崎　千穂
２．発表標題 19世紀後半における中央アジアのロシア医学の導入と梅毒対策
３．学会等名 ロシア史研究会2019年度年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 MIYAZAKI Chiho
２．発表標題 Medical Topography of the Russian Fleet and Mineral Springs in Unzen and Obama
３．学会等名 Symposium "International Models in East Asia in the 20-21 centuries: Sociocultural and International dimension"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 秋田茂、脇村孝平、木下太志、村山聡、友部謙一、宮崎千穂、勝田俊輔、小浜正子、大泉啓一郎、永島剛、竹田美文、花島誠人、廣川和花、高林陽展、磯部裕幸、千葉芳広、飯島渉、加藤茂孝	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 392
３．書名 人口と健康の世界史	

１．著者名 Под.ред. Тихо Миядзаки	４．発行年 2018年
２．出版社 Центр гуманитарных инициатив	５．総ページ数 147
３．書名 Медицина и Империя: открытые порты, вооруженные силы и благотворительность в XIX-начале XX в.	

１．著者名 羽賀　祥二編	４．発行年 2018年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 320
３．書名 近代日本の歴史意識	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関